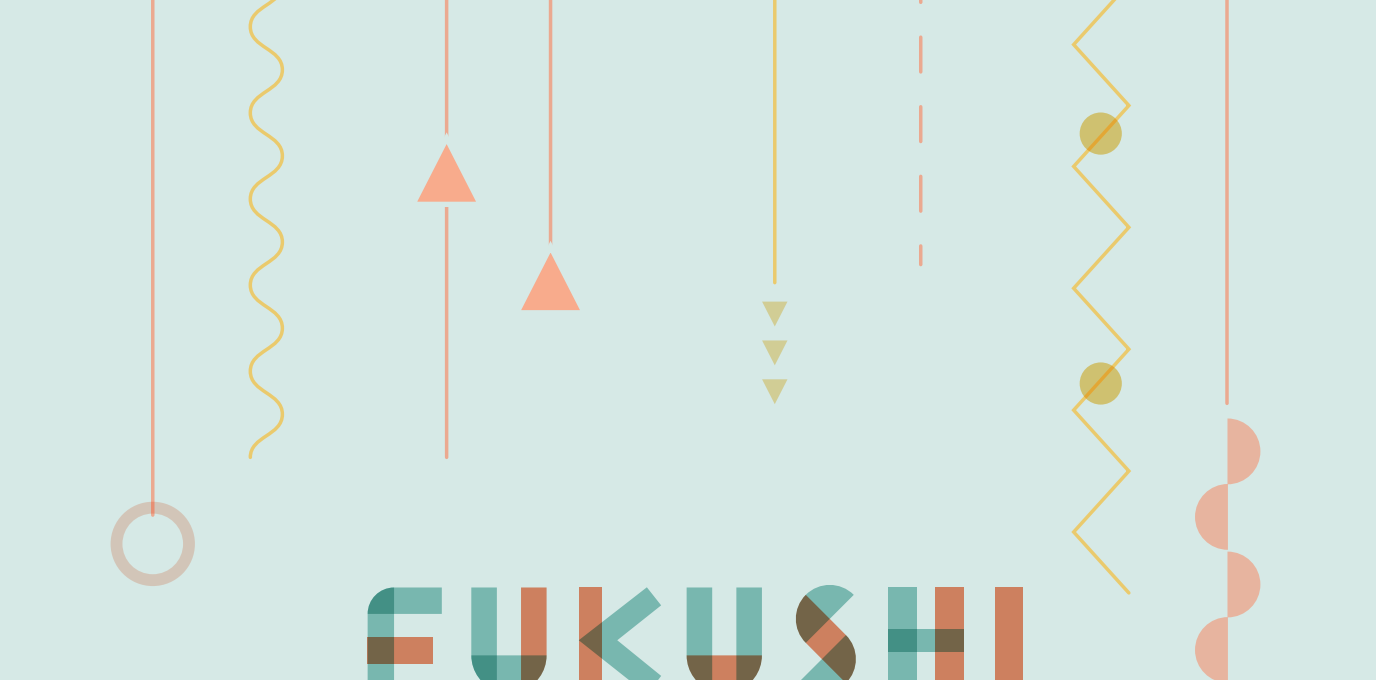


The top half of the cover features several vertical decorative elements. On the left, a thin red line with a light pink circle at the bottom, a yellow wavy line, and two red triangles pointing up and down. In the center, a yellow line with three small downward-pointing triangles. On the right, a yellow zigzag line with two yellow circles, and a red line with three overlapping semi-circles.

FUKUSHI とDESIGN 研究会

ANNUAL REPORT 2024

福祉とデザイン研究会とは？

この研究会は、2022年に滋賀県の長浜市社会福祉協議会の主催で始まりました。福祉分野における「困りごと」を、新たな可能性を生み出す資源＝「アイデアのタネ」と捉え、デザイナーなど多分野の専門家と協働しながら

ら育てていく試みです。福祉の課題を抱える当事者を中心としたチームがプロジェクトを進めるとともに、年3回開催される公開セミナーを通じて、インクルーシブデザインの考え方を学び、実践しています。



研究会の目指すもの

『システムの科学』の著者、ハーバート・A・サイモン氏は、「現状をより好ましいものに変えるための行為の道筋を考案することは、すべてデザイン思考である」と述べています。「福祉」とは、よりよい生活や地域のあり方を模索すること。本研究会は、「よりよく

する」という共通の視点を持つ「福祉」と「デザイン」を掛け合わせることで、分野や世代を超えたつながりと協働を生み出し、これからの地域をつくる新たなプラットフォームとなることを目指しています。



インクルーシブデザインの考え方

プロジェクトを進める上で考え方の軸となる「インクルーシブデザイン」は、デザインのプロセスに多様な課題を抱える人々を意識的に巻き込み、共に学び合いながら創り出していく考え方や手法を指します。

一般社団法人シブヤフォント様の協力のもと、研究会も3年目を迎え、運営側だけでなく、参加者であるプロジェクトチームのメンバーにもその考え方が少しずつ浸透しつつあります。

研究会の実践

2023年度に始まった3つのプロジェクトチームに加え、2024年度から新たに3チームが発足しました。テーマの異なる計6つのチームには、デザイナーやまちづくり関連企業など、多分野の人材がサポートとして参加し、プロジェクト全体を社協の担当職員が支えています。1年目のチームは、目指す未来像を描きながら活動を進め、2年目のチームはさらに発展させる形で、困りごとの当事者を起点に、より多くの人に共感されるアイデアを生み出し始めています。

インクルーシブデザインチャレンジ 公開セミナー

デザインロードマップづくり

2024年7月6日(土)



進捗報告 未来新聞ワークショップ

2024年10月19日(土)



最終報告 トークショー

2025年2月15日(土)



プロジェクトチーム

- グッジョブ×ジョブ
- ノリノリ's
- suinner

2023

2024

- ミラプロ
- わだちプロジェクト
- 平和堂

2024

グッジョブ×ジョブ

ミリョク発見！おしごとマッチング！



困りごと

発達しょうがいのある子どもたちは、職場体験の機会が少なく、「自分にどんな仕事に向いているのか」を知る機会が限られています。その結果、他者に勧められるまま就職し、働きづらさにつながってしまうこともあります。

実践

子どもたちが「仕事」を知り、体験する実践を通じて、自ら仕事を選ぶようエンパワーメントを高める取り組みを行いました。具体的には、就労への関心を高める「動画」の制作、職場への理解を深める「見学」、実務を学ぶ「体験」の3つの実践を行いました。

プロジェクトメンバー

実践者 ●森 秋子 ●藤田 恵理 デザイナー ●小障子 菜々子(星と道草)
支援者 ●はたらき・くらし・応援センター ●湖北基幹相談支援センター ふらっと

プロジェクトの動き

2年目を迎えたグッジョブ×ジョブチームは、農業、宿泊業、小売業、飲食業など様々な分野での体験を着実に増やし、2024年度中に約60回の実施、参加した若者は20名に達しました。最初は「発達しょうがい」の枠組みの中でプロジェクトを進めていましたが、仕事をのイメージが持てずに困る若者が多くいることがわかってきたことで、現在はより幅広い人々を対象とした取り組みへと発展しつつあります。



このプロジェクトをもっと知りたい！



instagam



youtube

研究会
ウェブサイト

ノリノリ'S ノリノリ'S

Act1「ノーフレイル リズムにのって リフレッシュ」

Act2「Alltogether リズムにのって つながろう」

困りごと

2020年以降、新型コロナウイルス感染症の流行により、サロン（※1）活動などが長期休止となり、高齢者のフレイル（※2）の進行が課題となりました。また、サロンの参加者からは、「既存のリズム体操よりも、もう少し易しく楽しい活動がしたい」という声も寄せられました。

実践

2023年度に体操ユニット「ノリノリ'S」を結成し、誰もが知っている曲に合わせて、「思ったよりも、もう少しだけ手が伸びる」ようなリズム体操や口腔体操を開発しています。開発を進める中で、「体操を通じた交流」にも役立つのではないかと気づき、年齢や文化の異なる人々のコミュニケーションツールとしての活用も検討しています。

プロジェクトメンバー

実践者 ●内貴 紀香(長浜市社会福祉協議会 サロン支援員) デザイナー ●池田 洵一(株式会社イケダ光音堂)

プロジェクトの動き

「琵琶湖周航の歌」や「喜びの歌」で、第1弾のリズム体操と口腔体操を開発したノリノリ'S。現在は、滋賀県民なら誰もが知る曲を使った新たな体操の開発を進めています。プロジェクト開始当初は「高齢者」を対象としていましたが、2024年度には外国人高齢者との交流を通じて、リズム体操が言葉や文化の壁を超えるコミュニケーションツールとして大きな役割を果たせる可能性を見出し始めています。



※1 サロン…小地域（自治会）単位で定期的集まり、おしゃべりなどをおして交流する場をサロンといいます。

長浜市では現在 259 箇所のサロンが活動しています。

※2 フレイル…健康と要介護の間の状態を指しますが、適切な予防・改善により健康に戻ることができる状態のことです。

このプロジェクトをもっと知りたい！



youtube

研究会
ウェブサイト

suinner スイナー

魅せたくなる 粋な服

Suinner

実践

これまで、車椅子ユーザーのための衣類「スワリオン」シリーズや冠婚葬祭衣装の開発を行ってきたマルチスイッチの木村さん。「しょうがいがあるからという理由で、大切な人の節目に立ち会うことを諦めることがないように」という木村さんの思いを大切にしながら、車椅子ユーザーに限らず「誰でも素敵に」着こなすことができる衣類の開発を行いました。

困りごと

社会で行われているさまざまな分野の商品やサービスの開発において、ほとんどの場合、マイノリティの人々の意見は考慮されていません。このプロジェクトでは、当事者を巻き込みながらインクルーシブな開発のあり方について実践を通じて考えていきます。

プロジェクトメンバー

実践者 ● 木村 寛子(マルチスイッチ) デザイナー ● ワタナベユカリ(株式会社 仕立屋と職人)
支援者 ● 荒井 恵梨子(合同会社 ケイフー)

プロジェクトの動き

数回の試作を経て、服自体が左右に二分割し、前からも後ろからも着ることができるジャケットがいよいよ完成しました。公開セミナーで試着した参加者からは「普通にかわいい」というコメントをいただきました。「車椅子ユーザー専用」ではなく、高齢の方やファッションが好きな人、誰でも素敵に着こなすことができるジャケットが生まれたことを感じる事ができた瞬間でした。



このプロジェクトをもっと知りたい！



マルチスイッチ

研究会
ウェブサイト

ミラプロ

10代が考える福祉のミライプロジェクト

実践

「福祉」という分野の仕事の広さや深さを、実際に働いている人たちから学ぶ機会をつくります。学んだことを生徒たち自身が発信し、将来福祉で働く人のすそ野を広げる方法を模索します。

困りごと

近年、福祉分野で働く人たちが少なくなっており、滋賀県立北星高校の福祉類型も年々生徒数が減少しています。福祉とは介護だけなのでしょうか。また、福祉の仕事はいわゆる「3K」のイメージがあるのでしょうか。これまでにない「福祉」の新たな側面や関わり方を発見し、未来の福祉人材に魅力を伝える必要があります。

プロジェクトメンバー

実践者 ● 高田 静江(滋賀県立北星高校教諭) デザイナー ● 中井 健太(合同会社 andstep)

プロジェクトの動き

本プロジェクトでは、長浜北星高校の生徒が福祉の魅力を再発見し、その発信に取り組みました。まず、介護の「3K」イメージを検証し、「感謝・感動・価値」のある仕事として捉え直しました。次に、外部の福祉分野で働く人々から話を聞き、給与や働き方についての理解を深めました。また、「私たちにできることは？」という視点で、ウェディングドレスの着付け介助にも挑戦。外部との連携を強化しながら、福祉の未来を担う人材育成を進めています。



このプロジェクトをもっと知りたい！

研究会
ウェブサイト

わだちプロジェクト

想像力をひろげよう

困りごと

例えば障害のある人など、社会のマイノリティ(少数派)の人たちは、日々の暮らしで様々なハードルを抱えています。障害がある人もない人も共に安心して暮らすことができます。そんな社会を目指して、「障害の社会モデル」の理解をひろげたいと考えています。

実践

社会のマイノリティ(少数派)の人たちが日々の暮らしで感じる様々なハードルを体感し、想像・共感を促すためのコミュニケーションツールを開発します。

プロジェクトメンバー

実践者 ●美濃部 裕道(NPO 法人 CIL だんない代表) デザイナー ●山田 彩(長浜まちづくり 株式会社)
支援者 ●鍵弥寿彦(NPO 法人りんくす) ●喜田知之(湖北基幹相談支援センター ふらっと)

プロジェクトの動き

「障害の社会モデル」への理解を広めるために、ゲームなどのコンテンツ作りと実践を行いました。実践の中で、「無理解よりも、無関心な人に向けて活動すべきではないか?」「では、どうすれば無関心な人の興味を引くことができるのか?」といった議論を重ねてきました。最終的に、「理解を促すためには、普段関わりのない他者の間にある、見えないカーテンを開けること」と結論づけ、コミュニケーションの最初のきっかけづくりとなるような実践の議論が始まっています。

このプロジェクトを
もっと知りたい!研究会
ウェブサイト

平和堂

はずむ心の職員研修

困りごと

平和堂では誰もが安心して通えるお店を目指して「認知症サポーターの取得」など従業員研修に取り組んでいます。その取り組みを従業員があまり認知していません。研修を受けても日ごろの業務で活用できる場面が少ないため、忘れてしまうことも。「認知症」「しょうがい」への理解とともに、それによって生じる「困りごと」に着目し、より安心して通っていただけ環境づくりが課題です。

実践

認知症の人と共に買い物体験をおこなうなど、お客様の「安心」につながり、従業員自身が仕事に誇りをもって取り組めるような研修プログラムを開発します。

プロジェクトメンバー

実践者 ●平和堂 デザイナー ●長浜市社会福祉協議会

プロジェクトの動き

誰もが安心して買い物できる環境づくりを目指し、認知症の方の買い物の様子を観察する研修を2回実施しました。従業員の多くは当事者と知らずに接客し、認知症であると感じることが非常に難しいということがわかりました。一方で、買い物を徐々に楽しんだ当事者の声を受け、困りごとの解決とともに「楽しくまた来たい」と思える場をつくることで、従業員の誇りにもつながるのでは、という気づきがありました。

このプロジェクトを
もっと知りたい!研究会
ウェブサイト

研究会後記

福祉とデザイン研究会とともに歩んだこの1年。
プロジェクトにはどのような変化があったのでしょうか。それぞれのプロジェクトについて、チームメンバーの振り返りをまとめました。
*2025年2月15日に行ったインクルーシブデザインチャレンジのトークを文章にまとめています。

2024年からのチーム

ミラプロ

中井さん(デザイナー)

体験など、仕組みづくりのデザインが実践できたのは良かったと思っています。外部の人材が高校教育に関わるって通常はあまりないですよね。それを先生を筆頭に実践してくださったのはすごく大きいです。
今回体験してくれた学生たちが、彼らの同世代にどれだけ伝えていける機会があるかということも、考えられたらもう少し良かったのかなと思います。

高田さん(当事者)

デザイナーさんのおかげで、生徒たちも専門職としてプロになるという意識を高めることができました。生徒たちに、自分たちにとっての3Kって何？と聞いたら、「感謝される仕事です。感動できる仕事です。価値のある仕事です。」ということを書いていました。自分たちで選んだ仕事を自分事として考えて、プロとして頑張っていきたいと言っているので、本当に自慢の娘たちですし息子たちです。



わだちプロジェクト

山田さん(デザイナー)

福祉って、本来であればまちづくりの中でも考えないといけない観点の一つだと思います。例えば古民家再生や長浜のシビックプライドを盛り上げるイベントを開催する際にも、抜け落ちていた部分です。これまで全く接点がありませんでしたので、すごく刺激的でした。

美濃部さん(当事者)

これまで、福祉以外の観点が大事なのではないかと、薄々思っていたんです。でも、実際に繋がろうと思うと簡単にはいかない現実で、この研究会でやっと繋がった。突破口が開いたな、というのが正直な感想です。



平和堂

木子さん(当事者)

私自身が今メインで関わっている仕事は福祉の関係ではないこともあるので、思考の切り替えが難しかったり、着眼点もなかなか難しく未だに試行錯誤させてもらっています。正直な話、まだちょっと手探り状態、でも何かが変わりそうというのが正直な感想です。



2023年からのチーム

グッジョブ × ジョブ

小障子さん(デザイナー)

最初の「発達しょうがいの子たち」という取り組みの趣旨から大きく意識が開いたなと感じています。その「意識が開いていった」ことが、私達の中で起こった変化です。
正直、私はまだ大したことが何もしないという実感なんです。みなさんの活動が積み上がってきて、みんなの体験が見えてきたところから、さて、これから何ができるだろうか、と考えていくのがデザイナーの役割なのかなというふうに捉えています。

森さん(当事者)

若者たちと一緒に私も仕事の体験をしてるんですけど、めちゃくちゃ面白いです。関わる大人も楽しみながらやれることが一番なのかなって思っています。



ノリノリ'S

池田さん(デザイナー)

ノリノリ'Sの体操は、2年間をかけて形ができあがってきました。ただ、実践の場所が増やせていないというのが課題として感じています。これからどう広げるかが一番デザインしていかなくらいいけないところです。そして、インフォーマルな活動だけでなくフォーマルな資源にしていけないといけないんじゃないかなというふうに思ってます。

内貴さん(当事者)

リズム体操の冒頭に「ノーフレイル！」って言うところがあるんですけど、サロンを見に行くと、そこからやったださっている方がいます。これがとても嬉しいなと思っています。昨年つくった体操を体験した高齢の方達の意見を反映させて、今年度製作したものはリズムがゆっくりのバージョンもつくりました。さらに、子どもたちも楽しめるものになっているのではないかとと思っています。



suinner

木村さん(当事者)

2年間改めて思ったことはやっぱりこの福祉の中で煮詰まっていると、ここから広がらないということ。障害があることで、そんな無理やとか、そんなもんやとかって言われてしまうことに違和感がありました。最初は、「こんなものがあつたらいいな」が漠然と頭にあつたんですけど、いま、実際に素敵な形になって、これから発売する。さきほども（一般の参加者が）自然と「着たい」「普通にかわいい」って言うてくださいました。ワタナベさんと知り合えてこんな素敵なものができたっていうのもすごく嬉しいです。

ワタナベユカリ(デザイナー)

デザイナーとして参加してて、福祉だからといって今までの仕事とそこまで違いはないというのは最後まで同じでした。
今回こうやって皆さんが研究会に何度も参加されてるのって、参加してるみんながめっちゃ楽しいという、珍しいパターンだと思うんですよ。きっと参加者みんなが本当にそれぞれのプロジェクトを「自分ごと」と考えているからだと思っています。
そう、楽しかったんですよ、私。



運営・アドバイザーのコメント



山岡 伸次(長浜市社会福祉協議会)

「福祉」と「デザイン」を横並びにしたのは、その言葉が意味していることが「より良い暮らしをつくろう」ということがきっかけでした。

今、「地域共生社会」かんたんに言うと「みんなが社会に参画し、みんなで地域をつくろう」という活動が全国で展開されています。この「地域共生社会」を進めるキーワードには「多分野協働」がうたわれています。それは、福祉という言葉は、もともとは仕事や専門性の「分野」をあらわすことばだった

のではなく、みんなのよりよい暮らしをつくることを意味しているからこそです。

この研究会の各プロジェクトは、ひとりの困りごとからスタートして、みんなの暮らしをより良いものにする取組みへと進化しています。世の中を変える…という大げさでむずかしく感じてしまいましたが、困っている誰かがいるからこそ、世の中が変わるチャンスにつながる、まさに「困りごとをアイデアの種」というキーワードそのものです。その種がさかせた花が、結んだ実はどのようなものだったのか、それは、プロジェクトに取り組んだ人様子をみれば一発で伝わってきます。これからも、そんな花や実が咲きほころよりよいまちを、みんなでつくっていきける。と感じています！



古戸 勉

(福祉作業所ふれんど施設長、一般社団法人シブヤフォント共同代表、社会福祉士)

ライラさんの話の中で、「お互いを知るからこそその成果物」「ゴールではなく継続と成長」といったキーワードが出てきました。私は障害者福祉の現場で 30 年以上働いていますが、こうした言葉は、現場ではなかなか出てきません。目の前の業務に追われ、利用者さんの対応に精一杯で、広い視野で仕事を捉えることが難しいのが現実です。

例えば、若い人が福祉の業界でやる気を持って就職しても、現場に入ると日々の業務に圧倒され、やりたいことが見えなくなってしまう。そうして潰れていった職員を私は何十人も見てきました。だからこそ、福祉の課題は社会全体の最優先事項であり、もはや「福祉」という枠組みだけで語るべきものではないのです。

今回のインクルーシブな発想は、決して「最先端」といった言葉では片付けられない、非常に重要な視点を持っています。皆さんの一つ一つの活動は単発で終わるものではありません。私自身も、とてもワクワクしています。



ライラ・カセム

(一般社団法人シブヤフォントアートディレクター、国立奈良女子大学特任准教授)

自分の愛がどこにあるのか。その「愛」が自分がやることの基盤になるんです。インクルーシブデザインも、昨年亡くなった私の母がずっと推進してきた活動です。なぜ母がそれをやっていたかという、「私の娘が大人になっても胸を張って生きていける社会になってほしい」ただその一心だったんです。皆さんの中にも多分、その愛が各プロジェクトごとにあるから、迷ったときは、その愛に戻ってください。愛に戻れば、何をすればいいかわかる。ただ

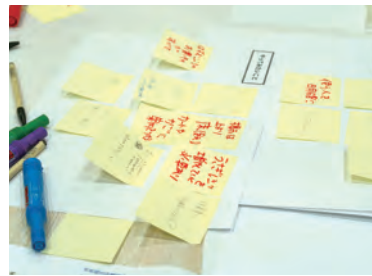
し、感情的になりすぎないこと。愛に戻って論理的に考えて、グッとくるものをやる。だから、このプロジェクトが続いてくれたのかなと私は思っています。

私が好きな詩人の言葉があるので、英語で直訳してみます。これもぜひ心に置いておいてください。

「課題は、全ての違いを取り消すことではなく、どうそれらをつなげ、違いたちを存在させるか」

インドの詩人ラビンドラナート・タゴール (Rabindranath Tagore) の言葉です。自分たちの違いを課題、問題と思わずに、どうやってそのそれらの良さを見つけ、広げ、お互いとともに存在させるかを考えれば、もっと皆さんのプロジェクトが良くなっていくかなと思うので、今後とも頑張ってください。

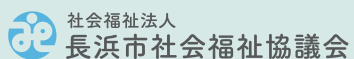




発 行 2025 年 3 月 26 日
主 催 福祉とデザイン研究会
発行元 長浜市社会福祉協議会
〒529-0341 滋賀県長浜市湖北町速水2745番地
長浜市役所 湖北支所内 3階

企画制作 長浜市社会福祉協議会
企画協力 荒井恵梨子（合同会社 ケイファー）
プロジェクト協力 一般社団法人シブヤフォント
助 成 中央共同募金会「赤い羽根福祉基金」助成事業

INFORMATION



福祉とデザイン研究会
HP